

招聘講演

へき地は医者ステキにする

日 時 6月30日(日) 10:10~11:10  
 演 者 奥野正孝(元々 鳥羽市立神島診療所 所長)  
 座 長 小田和弘(伊豆今井浜病院 名誉院長)  
 梅屋 崇(あま市民病院 管理者)

概 要 一人前になる前にへき地に身を置いてひとりでオロオロするのはおすすめである。ただし、医者になって3年目あたりでへき地に飛び込んでいくのは大変なことである。いや、大変であることがわからずに飛び込むから大変と言ってもよい。そして、本人はもちろんのことまわりの人達にとっても大変なのはいうまでもない。

こんなころの医者は例えれば赤ちゃんである。おなかがすいては泣き、気に食わなければスプーンを投げ、危ない所へ平気で突進する、なかなか目を離せない存在である。ただこの赤ちゃん医者にはとってもいいところがある。何かことが起これば、ほとんど無意識に無差別に、持てる力を精一杯使って、一所懸命ぶつかっていくのである。

そう、児童が五人でしかない小学校の運動会に診療所長として来賓で招かれ、リレーで走ることになり、目一杯走ったら、その一所懸命さに、保護者の皆さんや子供たちが喜んだように。そして、赤ちゃん医者は、様々な場面で、様々な人達とたくさんのお話をかわし、体当たりで挑み、たくさんの皆さんに辛抱強く支えられ、育ててもらうのだ。

そんな経験をしてきた元赤ちゃん医者に出会い話を聴くと、生き生きとした表情でこういう。改めて専門の楽しさに目覚めた。小さな集団より大きな集団を相手にしたい。日本から世界に。自分の城で理想を実現したい。教えることこそ本望だ。研究で病気と戦いたい。へき地の人と生きてゆきたい。へき地はやっぱり苦手かな?等々、実にたくさんの選択肢が飛び出してくる。

思えば、へき地ではとても小さいが各種機関がそこそこ揃って一つの社会を形成し、しかも話がしやすく風通しがよい。医療だけの限られた世界であった研修医時代を経て、へき地という地域を含んだ大きな世界で育つと、多様な考え方を身につけるようになるのかなと思った。そんな元赤ちゃん医者は、「立派」よりも、「素晴らしい」よりも、「ステキ」という言葉がとても似合っていた。

そして、私は2008年55歳になって、生まれだての研修医を地域医療研修という形でへき地に受け入れる三重県地域医療研修センターを、これまたたくさんの人たちに助けられて立ち上げ、その気合を示す言葉として「へき地は医者ステキにする」を掲げた。

【略歴】

- 1978年【25歳】 自治医科大学卒業
- 1978年 紀南病院へき地医療センター医師
- 1980年 鳥羽市立神島診療所所長
- 1982年 紀南病院へき地医療センター医師
- 1983年 自治医科大学地域医療学研修医
- 1984年 鳥羽市立神島診療所所長
- 1988年【35歳】 自治医科大学義務年限終了
- 1988年【35歳】 自治医科大学地域医療学教員
- 1998年【45歳】 鳥羽市立神島診療所所長
- 2008年【55歳】 三重県地域医療研修センター長
- 2018年【65歳】 三重県地域医療研修センター退職 医者屋引退